

## 知能と可塑性



野田 五十樹

(産業技術総合研究所人工知能研究センター)

人類は、群れ集うことで生き延びてきた。また、知能も、その群れ集うことで培われてきたと考えられる。もし、無人島に一人で生まれ育たざる得ない人類がいるとして、その育つ環境に、教育をするシステムだけが存在したとしても、はたしてその人に「意識」、「知能」が芽生えるであろうか。個人的には意識・知能は生まれえないのではないかと、意識・知能には同等の知的他者が存在する社会が必要ではないかと、考えている。

学会も、群れ集うことを前提として存続・発展してきた。研究テーマの近い専門家どうし、発表の場を共有し、そこに集うことでいろいろなアイデアを客観的に吟味し、公正に評価する。それにより学術知識の発展に寄与することが学会の機能であり使命である。

この「集う」ということを、現在、制限せざる得なくなってきた。この原稿を執筆している時点では、非常事態宣言も延長され、人々は籠城を余儀なくされている（「籠城」は全国大会が行われるはずだった熊本市が掲げた標語である。「stay home」より、語感的に気に入っている）。学会の活動も、3月よりほとんどすべての集会はキャンセルもしくはオンライン開催となっている。これからはばらばらの間のイベントも同様になっていくだろう。これから先は、以前のように自由に集いあえるような社会は戻ってこないのではないかと、絶えず三密を避ける活動を続けていかなければならない、ということも覚悟せざる得ないかもしれない。そういう大きな変革期に我々は居合わせてしまったと認識したい。

脳には可塑性がある。脳は領野ごとに機能が分かれているが、けがなどである領野が損傷してその機能が失われても、周辺の領野が徐々に変化・分担することで、もとの機能を復活させる。その脳の機能の発露である知能にも高いレベルの可塑性があるはずである。そもそも、変化する環境、新しい環境に対応できることこそ、知能の本領のほずである。集うということが制限された環境でも、それに適応した知能というものが培われていくと考えられる。はたして、その知能が、これまでの知能と同じものなのか、それはわからないが、その違いを探求することも、人工知能の研究テーマになり得るだろう。

人工知能学会も、可塑性のある知能を研究テーマとする学会として、同様の可塑性を発揮できる組織体でありたい。すでに大会や研究会のオンライン開催は広く行われてきており、やり方によっては面白い効果がある事例も起こりつつある。理事会や委員会もオンラインへの移行が既定路線であり、まだ議事進行にぎこちなさは残るものの、定着していくことになるだろう。今回の事態とは直接関係ないが、冊子・文書類のオンライン化も加速するのは間違いない。幸いにして、IT環境の充実により、学会機能のオンライン化はそこそこ可能であるようにも見える。

一方、オンラインばかりでは埋められない機能も学会にはあるように思う。研究会や全国大会がさまざまなところで開催されることには、リフレッシュして新しい着想を得る、という側面もあるように思える。オンラインでの会議のはしごをしていると、移動の労力や時間は節約できるものの、その分、頭のリフレッシュができない。美味しい食事と酒を共に楽しみながら、知能について語り合うということができなくなることも寂しい。今のような状況になることで、場所や環境を変えながら研究集会や委員会を行っていたということにより、頭を切り替え新しい着想を得ていたことに気付かされる。こういう側面を補っていく手段を、これからの学会では考えていかなければならないように思われる。

ニュートンは、ベストで田舎に疎開せざる得なくなったとき、その重大な科学的功績を発展・完成させたといわれる。同じように、今回の社会的事態を機に、学会も新しい機能を担う組織として、可塑的に変わっていくことになるだろう。このような変革期に、会長としての大任を担うことになった。筆者にできることは限られているだろうが、学会員の皆様とともに、ぜひともこの変化に対応できる学会としていきたい。